

アムールの風

正統右翼の論理

第19回 田中健之
(黒龍會会長)

第三章
歴史的考察から見える歪んだ世界秩序
日本に好意的なロシア人、
友好を結ぶべきロシアへの偏見

―― 圧政に苦しむロシア人 ――

日露の関係を考えて時に、忘れてはならない人物がいま
す。かつて日露戦争前後の時代に、日露の交流を深めよう
とした内田良平です。

当時、大陸問題に関心がある人々の間では、清国および
朝鮮に対することが中心でした。

そこで内田は、「先輩の多くは、隣国であるロシアとい

ました。そこで、シベリア鉄道が開通する前にロシアを叩
かなければ、日本は国家存亡の危機に陥るとして、「対露
主戦論」を唱えていました。

それと共に、スイスなどに亡命していた、ロシアの革命
派の人々に対して、日本を友として、日本と一緒に帝政ロ
シアに対する戦いをすべきであることを主張しました。ロ
シアから帰国した内田は、自ら具に観察して来たロシアの
情況と分析を、『露西亜亡国論』という本に著して出版しま
す。しかし、それは即日発禁になってしまいました。
何故かという点、ロシアを恐怖する日本政府は、対露主
戦論を展開するような書物が出版された場合、ロシアから
外交的な圧力がかかって、日本が攻められる危険があると
いう、妙なロシア恐怖症があったからです。

言論の自由がある現代では、そのくらいでは発禁処分に
なりません。当時は政治的な本の出版は厳しい時代でし
た。ロシアと一戦を構えるべしと主張をした『露西亜亡国
論』は、怖い本だと日本政府に決めつけられてしまったの
です。

これに対して、無政府主義者の幸徳秋水が著した、『帝
国主義論』は発禁になりませんでした。いかに当時の政府が、
『露西亜亡国論』を恐れていたかがわかります。

う国について興味はなく、その国のことについてほとんど
知らない。また、いたずらに恐露症の人も多い」というこ
とから、ロシアの実態を詳しく知らなくてはならない、と
いう志を持つようになりました。

彼は三国干渉をきっかけに、ロシアへ行く決意を固め、
明治二十八(一八九五)年に単身ウラジオストックに渡って、
柔道場を開き、明治三十(一八八七)年から約一年間、世界
ではじめて単身でシベリア横断に成功した人です。

彼は、その時に具にロシアの状態を観察し、帝政ロシア
の国情が非常に危機的な状況下にあることを覚りました。
そのため近い将来、人民の憤懣が爆発して、彼らが立ち上
がるに違いない、とロシア革命を予見しました。

その時に帝政ロシア政府は、国内に充満する人民の不满
を対外に逸らすべく、南下して来るだろうと、彼は分析し

ところで、内田良平はロシア人を憎んでいたわけではな
くて、むしろ親愛なる感情を抱いていました。『露西亜亡
国論』の中に「スラーヴよ、汝の友は東方より来たり」とい
う名言があります。それは、圧政に苦しめられているロシ
アの民衆に対して同情を寄せ、ロシア民衆の解放を援ける
のは日本人なのだという自負がそこには漲っています。

明治三十一(一八九八)年の初夏のこと、シベリア単身横
断の成功を収めた内田良平が、帰途に就いた時のことで
す。あたかもその時、シベリアには花季が訪れていました。
彼がネルチンスクからハバロフスクまで黒龍江を下った時、
その兩岸には、名も知れぬ万木の花が一齐に咲き乱れ、満
目爛漫、目も覚めるばかりの粧いをこらしていました。

初めてこの壮麗な饗宴に接した内田は、「おう」と歓喜の
声を上げ、神々の恵みに拝跪したいような敬虔な念に打た
れました。

「我々の使命は、全アジアの社会をこのような花苑にす
ることだ」と彼は心に誓いました。

明治三四(一九〇一)年二月、内田良平が結成した国民運
動団体を「黒龍會」と命名したのは、この時の祈りにも似た
胸中の誓いを、彼の生涯にわたって記念するためでありま
した。

即ち、黒龍會の黒龍とは、黒龍江の黒龍であって、すなわちそれは、アムール河の「アムール」であって、ロシア語で「アムール」とは、キューピットを意味します。それは、「ブラック・ドラゴン」という意味の黒龍ではありません。黒龍會の黒龍を「ブラック・ドラゴン」と誤訳したのは、日本を占領した連合軍であり、黒龍會をいかにもオドロドロロしい、犯罪組織的な秘密結社のような悪印象を社会にもたらすために、意図的に誤訳したものです。

黒龍會の活動の一つに、日本では極めて数が少なかった、ロシア語の学校の設立がありました。

さらに内田は、日本とロシアがいい関係を保つために、日露協会という日本とロシアの交流団体を設立し、榎本武揚（えのもと たけあき）を会頭に組織しました。

日露協会が設立した日露協会学校は、後に幻の名門校と言われた、ハルビン学院です。同校はナチスの迫害を逃れたユダヤ人に対して生命のビザを与えた、外交官杉原千畝（しげはら ちげん）や評論家の内村剛介など、ロシア通の人々を多々輩出しています。

——大きな権力を信じないロシア人——

レート屋のモロゾフからも日本に亡命しており、日本人との交流を盛ん（おこ）に行っていました。

私は、一九九二年に中共政府に対する反体制組織、民主中国陣線（本部パリ）の拠点をロシアに作るためにモスクワとサンクト・ペテルブルグに滞在していました。その拠点作りは、ロシア側の協力によって、一応作ることはできましたが、日本から派遣した中国人に問題があり、結局、中国人の組織は途中で工作が頓挫（とんさつ）するハメとなりました。その後、彼らの拠点はロシアからオランダのアムステルダムに移行せざるを得なくなりました。

しかし私は、そのままロシアに残ることにしました。なぜ私が、ロシアに残ったのかというと、それはロシア人が非常に親日的で驚いたからに他なりません。それで私は、対アメリカ、対中国、対北朝鮮に日本が関わるためには、日露関係を強化すべきだという結論に至ったのです。ロシアで良き友人を作って、ロシアのことについて深く知ろうと思ったのです。

この時、私とほぼ同年代のセルゲイという名のモスクワ大学出身の友人ができました。彼は『古事記』をよく読んでいて、神道に関心が高い人でした。

私は彼と初対面の時に、あまりにも彼が『古事記』につい

ところでロシアは、アメリカのように移民による人工的な多民族国家ではなく、もともと多民族国家でした。ですからロシアには、トゥヴァ、ブリヤート、カルムイクというチベット仏教国家が三つあるほどです。彼らの顔貌（がんぼう）は、日本人と大変よく似ています。

ロシアという国は、二〇世紀に二回も国家が崩壊しています。それはロシア帝国とソビエトの時代です。そのためにロシア人は、ある意味では、流浪の民（りゅうりやうのたみ）のようなところがあります。ですからロシア人には、大きい権力をあまり信じない面と、かなりアナーキーな部分があります。

常に安定した土地を求めて、流浪しなくてはならないという潜在意識があるため、ロシア人は、権威とか権力とかを信じ難く、根本的に共産主義が嫌いです。

共産主義者によって殺され、シベリアに流刑された犠牲者は、ほとんどがロシア人自身です。従って彼らは、共産主義の恐怖を実体験として知っており、多くの人が共産主義を憎んでいます。

日本とロシアの関係史を見ると、ロシア帝国が滅亡した時に、多くのロシア人が、日本に亡命しています。

その中には著名人も少なくなく、トルストイの娘をはじめ、近代バレエを伝えたエリアナ・ハプロヴァや、チヨコ

て詳しくかったので、大変に吃驚（びっくり）しました。日本人もなかなか読まない日本の神話について、同年輩のロシア人がよく知っていることに感動したものです。

反対に、ロシア文化について詳しく知る、自分と同年輩の若い日本人を知りませんでした。当時、私はまだ若くて二十九歳になったばかりでした。

彼と話をしている、お互いに共通の認識を持ったことは、若い同世代の日露の青年たちによる民間交流がほとんどないということでした。そこで、私とセルゲイ氏は同世代の日露の青年を集めて、日露善隣協（にっろぜんりん）會（かい）という交流団体を立ち上げ、それは今日に至っております。

セルゲイ氏から私は、いろいろな日本への関心が深い同世代のロシア人を紹介してもらいました。例えば、モロジャコフ・ワシーリー氏。彼は日本政治史に非常に詳しく、玄洋社や黒龍會についての本も書いています。彼自身、大川周明博士を尊敬しています。ワシーリー氏は今日、拓殖大学日本文化研究所の教授として活躍しています。ちなみに彼の母上の故エリゲナ・モロジャコフ博士は、ロシア科学アカデミー東洋学研究所の副所長兼日本研究センター長を務めた方で、私は同博士に依って、ロシア科学アカデミー東洋学研究所の客員研究員の資格を得ることができま

した。

その他、日本近代史に詳しいジャーナリスト、日本の温泉通の人など、とにかく日本について関心がある、興味深いロシア人を次々にセルゲイ氏から紹介を受けました。

ちなみに私は、二〇一四年に『実は日本人が大好きなロシア人』(宝島社)という著書を出しました。そこに出てくるロシア人のほとんどが、私の友人たちですが、彼らは皆、日本が大好きで、日本についての造詣が深い人たちばかりです。

日露善隣協会は、約三十年近い時を経た今日でも、定期的に勉強会や日露人士の交流会を続けてやっています。すなわちそれは、私のロシアでの体験やロシア人との交流を通して、日露間の民間交流の重要性を痛感したからに他なりません。

お互いの理解をなくして、ロシア問題は語れないことを私は痛感しています。

——実はアジア人だったロシア人——

ロシア人は、表面上は白人ですが、「タタールの頸木」という言葉があるように、アジア人の血が混じっていて、文

ヨーロッパがいかにアジア、アフリカを植民併呑し、彼らから収奪し続けてきたことか。長年にわたり植民地として、アジアやアフリカの人民の血や汗や涙を吸ってきたのか、ということに対する被征服者からの回答が、今日、西欧各国で生じている移民による文化摩擦やテロなのです。

まさにそれは、一種の報復です。当然、起こるべきして起こっている、と言えるのです。

——スターリンの北海道占領計画を挫いた

樋口季一郎中将——

ところで今日、日露関係に大きく横たわる北方領土問題については、後で詳述しますが、基本的には米露問題です。大東亜戦争末期、日本は悲壮な決意の下、一億玉砕の覚悟をもって、本土決戦を準備していました。

アメリカは本土決戦となれば、アメリカ軍に大きな犠牲が出るため、本土決戦となる前に、日本を敗戦へと追い詰めるために、当時、日本と中立条約を締結していたソ連を戦争に引きずり込んで、その代償として北方領土を与える密約を、アメリカのルーズベルト大統領はソ連のスターリン大元師と交わしました。それがテヘラン会談を経て、米・

化的にも精神的にもロシア人はアジア人なのです。

内田良平もそのことを実感していました。だから黒龍會では、ロシア、ハンガリーそしてフィンランドまでもを一つのユーラシア大陸、一つのアジアという概念で活動していました。黒龍會の精神と道統を継承した私が、その再興の趣旨として、「大アジア主義を発展させた独自の大ユーラシア主義」を唱えている理由は、まさにそこにあります。

事実、今日のフィンランドやハンガリーには、アジア系民族による「ツラン民族運動」の拠点があります。その範囲は、かつてのモンゴル帝国の版図ぐらいあります。それを言うときアンゲロサクソンを中心とした欧米人はものすごく嫌がります。何故ならば、それはいわゆる欧米的な、西歐的な近代主義に対するアンチを意味しているからです。

しかし今日、ヨーロッパ人自身が、西歐的近代主義が行き詰まっていることがついています。

西欧諸国では、あちらこちらで移民による文化摩擦やテロが頻発しています。畢竟、それは西歐的近代主義、植民地主義によって、大きな発展を遂げたヨーロッパ人に対する、被植民地の民衆による反撃なのです。暴力的なこともあり残念なことです。それは欧米の植民地主義者に対する一つの回答なのです。

英とソ連が交わしたヤルタ密約です。

つまりスターリン大元師は、ルーズベルト米大統領およびチャーチル英首相と秘密協定を結び、日本に参戦する見返りとして、南樺太とすべての千島列島を得る了承を得ていたのです。

そして戦後は、東西冷戦を見越した、いわゆるポツダム体制の中で、東西ドイツ、南北朝鮮と同じように、日本の一部が分断化されたのです。それが、北方の島だったわけです。

スターリン大元師は、北海道も視野にソ連の日本占領政策を進めていたため、北海道がソ連占領下として分断される危険性もありました。

スターリン大元師は、不凍港である釧路を欲しました。そのためにスターリン大元師は、南樺太と千島列島を短期間で占領し、前線基地として北海道にだれだれ込む計画でした。

ロシアに残されている当時の公文書によると、スターリン大元師は対日参戦直前に「サハリン(樺太)南部、クリル(千島)列島の解放だけでなく、北海道の北半分を占領せよ」と命じていたことがわかります。記録には、北海道の北半分を占領するとされていますが、スターリン大元師は、あ

わよくば、北海道全島を占領しようとしていたのです。

昭和二十(一九四五)年八月十六日、スターリン大元師はトルーマン大統領に書簡を送り、留萌から釧路以北の北海道を占領させるように要求しました。トルーマン大統領はこの要求を拒否しますが、その後もスターリン大元師は、南樺太にいた第八十七歩兵軍団に北海道上陸のための船舶の用意を指示していました。

そのためソ連軍は、日本軍が降伏した後の八月十八日になっても、南樺太や千島列島でも戦闘を中止せずに占領作戦を開始し、日本軍を攻撃しました。

これに対して、第五方面軍司令官樋口季一郎中将は、第九一師団の堤不夾貴師団長に対して「断乎反撃に転じ、ソ連軍を撃滅すべし」と命じました。

日本政府は、ポツダム宣言を受諾し、日本軍は無条件降伏をしましたが、それまでの自衛戦争は許されていたのです。

「私自身は、ソ連が更に進んで北海道本島を進攻することがないかと言う問題に当面した。私としては相当長期にこの問題に悩んでおり、一個の腹案を持った。即ち、ソ連の行動如何によっては自衛戦闘が必要になるうということだ」と、樋口中将は『遺稿集』に記しています。

かったのです。

北海道占領を断念したスターリン大元師は、八月二八日、南樺太の部隊を択捉島に向かわせ、国後島、色丹島、歯舞諸島を次々に占領しました。スターリン大元師は本来、北海道に送り込むはずの部隊を、北方四島に送ったのです。北方四島では、占守島のような抵抗もなく、ソ連軍はそこを無血占領しました。

九月三日、スターリン大元師はソ連国民への布告を出し、「日本に不法に侵略されたサハリン(樺太)とクリル諸島(千島列島)を解放した」と宣言したのです。

スターリン大元師は、昭和十五(一九四〇)年の日ソ中立条約の締結交渉で、すでに樺太と千島列島を日露戦争で失った領土だとし、「回復すべき失地」と主張していたのです。

その後、スターリン大元師は樋口季一郎中将を戦犯として引き渡すように申し入れましたが、マッカーサーはこれを拒否しました。それは、在米ユダヤ人団体が、樋口の引き渡しに反対して圧力をかけたからです。

樋口中将がハルビン特務機関長を務めていた、昭和十三(一九三八)年当時、彼はナチス・ドイツに追われてソ満国境のオトポール(現ザバイカリスク)に逃げ込んできたユダ

第九一師団の将兵は、勇敢にこの自衛戦闘を戦い、濃霧で上陸に手間取っていたソ連軍を、集中砲火によって、波打ち際で叩き、ソ連軍に大損害を与えました。双方の記録によると、日本軍側が六〇〇〜一〇〇〇人、ソ連軍側が一五六七〜三〇〇〇人の死傷者を出す激戦が続きしました。

日本軍は終始優勢を保っていました。最後は停戦協定によって武装解除に応じざるを得ませんでした。降伏した日本兵は全員、シベリアに抑留され、多くの人が命を落とすにやみませんでした。

「勝者が敗者に武装解除されたのは何とも残念」だと、樋口中将は無念の思いを吐露していました。

このように第五方面軍の抵抗によって、スターリン大元師の北海道占領計画は出足から躓き、狂いが生じました。

ソ連軍の作戦行動命令書では、占守島は一日で占領することになっていましたが、現地で停戦協定が結ばれ、日本軍が武装解除したのは、八月二三日のことでした。

さらにソ連軍は、千島列島を南下しましたが、北千島南端の得撫島の占領完了は八月三一日のことでした。

九月二日、日本は降伏文書に署名し、国際法上でも終戦が確定しました。樋口中将が率いる第五方面軍の抵抗がなければ、ソ連軍は北海道にだれ込んでいた可能性が高

ヤ系ドイツ人に食料や燃料を配給し、日本政府と軍部を説き伏せて、満洲国の通過を認めさせていました。

ドイツは日本に抗議し、関東軍司令部は樋口ハルビン特務機関長(当時)を呼び出して査問しました。

しかし樋口機関長は、当時、参謀長だった東条英機中将(当時)に対して、

「ヒトラーのお先棒を担いで、弱いものいじめすることには正しいと思われませんか」と問い質しました。

これに対して東条参謀長も樋口機関長を不問に付し、「当然なる人道上の配慮によって行つた」と、ドイツの抗議を一蹴したのです。

ここに日本人の正義があり、その正義が日本を東西ドイツや南北朝鮮のように分断国家になる危機から護られたのだと、私は信じてやみません。



田中 健之 (たなか たけゆき)

歴史作家、維新運動家、昭和38年11月21日生まれ、福岡市出身。文芸春秋社初代社長岡浩太郎の曾孫で、黒澤会を創立した内田良平の血脈を継承する親族。拓殖大学日本文化研究所近現代研究センター委員研究員を経て、現在、ロシア科学アカデミー東洋学研究所及びモスクワ国立教育大学外国語学部客員研究員、日露歴史協会の会長、2008年に黒澤会を再興し会長に就任。主な著書に「靖国に祀られる人々」、「昭和維新」、「北朝鮮の終極」、「美は日本が大好きロシア人」(横浜中華街)など、中央公論「正論」、歴史群像などの論議誌に多数執筆。